

今回は、イエスが逮捕され裁判にかけられる過程を追いながら、そこで織りなされるいくつかの人間模様を見ていきたいと思います。その中に「わたし」が、そして「あなた」がいます。

✠ イエスの十字架上の死と復活 (4) 十字架への道 (2)

イエス、逮捕される

「ゲッセマネの園」は、イエスがたびたび弟子たちを連れて集まっていた場所だったので、ユダも知っていました。彼は松明^{たいまつ}や武器を手にした兵士らとやって来ました。

..... 『マルコ』 14 章 43~50 節

43 さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが歩み寄ってきた。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群集も、剣や棒を持って一緒に来た。44 イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。45 ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。46 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。47 居合わせた人々のうちのある者(『ヨハネ』ではペトロ)が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。48 そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。49 わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」50 弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げた。

.....
イエスを逮捕するために祭司長たちにより遣わされた神殿警備隊に加え、剣や棒を持った群集もやって来ました。満月とはいえ、灯りといえば松明の火ぐらいであり、みんな同じような服装をして、ひげ面のユダヤの人々の中でイエスを見つけるのは簡単ではありません。ユダは自分が接吻する男がイエスだと、あらかじめ打ち合わせをしていたのです。イエスの逮捕劇はあっという間の出来事でした。

49 節に『これは聖書の言葉が実現するためである』というのは、『詩編 22』にある記述と関連しているといわれます。すべてを引用すると長くなってしまいますので、いくつかの節を取りあげてみます。

『詩編 22』の 12~14 節には、『12 わたしを遠く離れないでください。苦難が近づき、助けてくれる者はいないので。13 雄牛が群がってわたしを囲み、 / バシヤンの猛牛がわたしに迫る。14 餌食を前にした獅子のようにうなり / 牙をむいてわたしに襲いかかる者がいる。』とあります。12 節はまさに逮捕される前のイエスの祈り、13 節は彼を捕まえに来る者たちを表しているようです。また、ちょっと先走りますが、2 節には『わたしの神よ、わたしの神よ / なぜわたしをお見捨てになるのか。』という言葉があり、これはイエスが死の直前、十字架上で叫んだ言葉です(『マタイ』 27 章 46 節)。さらに、9 節『主に頼んで救ってもらおうがよい。 / 主が愛しておられるなら / 助けてくださるだろう。』は、ゴルゴダ(イエスの十字架刑が執行された場所)で人々がイエスに向かって叫んだ『神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。』『わたしは神の子だ』と言っ

ていたのだから。』（『マタイ』27章43節）という言葉と関連しています。

『ヘブライ語聖書(旧約聖書)』と「十字架の出来事」との関連

『旧約聖書』はイスラエルの人々が、自分たちをエジプトから救い出してくださった神を捨てて偶像礼拝に走ったり、預言者たちの言葉に聴く耳をもたなかったなど、歴史の中でいかにこれまで神さまに背いてきたかをまとめて書き残した書物とも言えます。これが『ヘブライ語聖書』です。彼らはこれを正典として「ユダヤ教」の信仰を確立させました。

イエスはこのユダヤ教の信仰の中で育ったわけですから、「ユダヤ教徒」ということになります。ですからこの『ヘブライ語聖書』をたびたび引用して、弟子たちや一般民衆に話しました。イエスはこの聖書を隅から隅まで読み、すべて覚えられていたと言われます。

こんな話が『ルカ』2章にあります。両親と過越祭にエルサレムに行ったとき、(ヨセフとマリアは)『⁴⁶ イエスが境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問しておられるのを見つけた。⁴⁷ 聴いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。』というほどだったのです。

山浦玄嗣^{はるつく}先生によれば、ユダヤ人は男子13歳で元服の儀(これをバル・ミツバという)を行い、そこでそれまでに学んだ尊い掟(律法)をよく理解しているかどうか、律法学者の前で試されたといえます。12歳でありながら自分から進んでこの「試験」を受けたと考えられるので、その生まれつきのとびぬけた才覚は、この頃から明らかだったようです。

イエスが語った話には、『これは聖書の実現するためである』とか、『律法では～と書いてある』というように、『ヘブライ語聖書』から引用されている言葉が多く見られます。ですからこの書は、キリスト教が成立していく過程において〈イエスを指し示す書〉〈イエスの出現を暗示している書〉として考えられるようになり、『旧約聖書』としてキリスト教の正典に加えられました。

弟子たちは …

『マルコ』14章に戻ります。誰一人としてイエスを助けようとした者はいませんでした。50節に『弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げた。』とあります。弟子たちでさえ「逃げた」のです。夜が明ければ祭司長や衆議会は、自分たちをイエスの仲間として捜しまわるに違いありません。弟子たちはそれが恐ろしかったのです。

この弟子たちは最後の晩餐の時、イエスに対して次のように言っていました。

.....
³⁶ シモン・ペトロがイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのですか。イエスが答えられた。
「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後でついて来ることになる。³⁷
ペトロは言った。「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。³⁸
イエスは答えられた。「わたしのために命を捨てると言うのか。はっきりしておく。鶏が鳴く
までに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

..... 『ヨハネ』13章36～38章.....

「あなたのためなら命を捨てます」…。それほどイエスに従う強い決意を言葉に表したペトロでした。ペトロは、『マルコ』14章でも『たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのこ

とを知らないなどとは決して申しません。』と言ったと書かれています。

鶏が鳴いた …

逮捕されたイエスは、まずユダヤ教の最高聖職者である大祭司がいる最高法院へ連れて行かれました。ペトロともう一人の弟子は、イエスがどうなるのかを見極めるために、距離を置いて後ろからついて行きました。その後のペトロの行動を、『ヨハネ』18章15～27節から要約すると次のようになります。

ペトロが屋敷の中庭に入ると、門番の女中に「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか」と言われました。ペトロは『自分はそんな者でアねア！』（山浦訳、以下同様）と否定しました。そしてペトロが暖をとるために炭火にあたっていると、まわりの人々が「お前もあの男の弟子の一人ではないのか」と言い出しました。ペトロは再び『バ、とんでもねア！ 自分はそんな者でアねア！』と打ち消しました。さらに、ゲッセマネの園でペトロに片耳を切り落とされた人の身内の者が、「園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか。」と追求しました。ペトロはまた『そんなな(そんな馬鹿げた)事はある訳がねア！』と否定しました。3度目です。『ちょうどその時、鶏が時をつくった(するとすぐ、鶏が鳴いた)。』…。『鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう』と言ったイエスの言葉通りのことが起こったのです。

遠藤周作氏に言わせると、『ぐうたらな弟子たち。弱虫の弟子たち。我々と同じように卑怯で卑劣だった弟子たち』ということになります。この箇所を読んでいると、「あれだけのことを言っていたのに …」と、弟子たちにふがいなさを感じた方も多いと思います。

でも、しかし — です。もし私たちがこの場面に立ち合ったら、どういう行動をとるでしょうか？ わたしなら、たぶん・おそらく・もしかしたら、いえ、確率 100%でペトロと同じだろうなあ … と思ってしまいます。わたしも弟子たちと同じような「ぐうたらで・弱虫で・卑怯な」人間という自覚があるからです。

あのパウロも書いています。『わたしは、自分のしていることがわかりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです』（『ローマの信徒への手紙』7章15節）。

パウロ：成立直後のキリスト教を世界的宗教にする端緒を開いた伝道者・神学者。彼によって書かれたとされる13の書簡(「パウロ書簡」と呼ばれる)が『新約聖書』に収められていて、その影響力は極めて大きい。ユダヤ教徒(ファリサイ派)でキリスト教徒を迫害していたが、迫害の途上において幻の中で復活のイエスとの出会いを体験し、キリスト教徒になった — という人物。この人については今後の話の中で、何度も登場してきますので覚えておいてください。

弟子たちだけではありません。ユダヤ教指導者に見られる自己中心性・排他性・傲慢さ・金銭への執着などのエゴイズムが、程度の差こそあれ私たちの中にも巣食っていることを認めざるを得ないでしょう。

しかし、そんな弟子たちがイエスの死後、その教えを命がけて伝道していきます。この〈人生の大転換〉はなぜ起こったのか…。今後のお楽しみです。

裁く人たち① — 最高法院における「宗教裁判」

ユダヤ教の指導者たちの目的が、邪魔者であるイエスを「この世から消す」ことだけであれば速

捕後ひそかに殺してしまえばよかったはずですが。しかし彼らは裁判にかけ、「法」に従ってイエスを「犯罪者」として処刑することを望みました。なぜなら、彼らの意図はイエスという一人の人間の抹殺だけではなく、イエスに向けられていた力による「ユダヤ民族再興」という人々の期待や、ユダヤ教を揺さぶるイエスが説く信仰全体を打ち砕くことにあったからです。つまり、イエスはメシア的救済者でも優れた宗教指導者でもなく、犯罪者としてみじめな最期を遂げた者だったということを示そうと考えたのです。

イエスは二つの裁判にかけられます。第一は、大祭司が裁判長であるユダヤ教の「宗教裁判」です。ここで祭司長、長老、律法学者たちはイエスにとって不利な証言を得たいと思ったのですが、人々の証言には食い違いが多かったといえます。イエスを断罪するための決定的な証拠が見つからなかったのです。そこで大祭司はイエスに問いかけます。

.....
61 「お前は讀むべき者の子キリストか」。 62 するとイエスは言った。「私[がそれ]だ。そしてあなたたちは、〈人の子〉が力ある者の右に座し、天の雲と共にやって来るのを見るだろう」。

63 すると大祭司は彼の衣服を切り裂いて、言う。「われわれはどうしてこれ以上証人が要るだろうか。 64 諸君はこの冒瀆の言葉を聞いたのだ。諸君にはどう見えるか」。すると全員が彼を断罪し、死に定められた者とした。

..... 『マルコ』 14 章 (佐藤 ^{みかく} 研 訳)

『マルコ』では、「お前は讀むべき者(つまり、神)の子、メシアなのか」という問いに対して、イエスは「そうです」と肯定的な答をしたと書かれています。ところが『マタイ』26章64節、『ルカ』22章70節を読むと、イエスは「それは、あなたが(勝手に)言ったことです」と曖昧に答えています。どちらが事実なのか、諸説あるようです。おそらくイエスは、問いに対してまともに答えなかったのではないかと考える先生方が多いようです。

それはともかく、結局イエスはこの「宗教裁判」で、その身分を越えた「メシア」という称号を勝手に名乗った者、すなわち〈神への冒瀆者〉であるので、「冒瀆罪」で死刑に値するとされたのでした。しかし、当時のユダヤはローマ帝国の属国だったので、イエスを死刑にする権限はユダヤ教の指導者にはありませんでした。死刑の執行権はローマ人のユダヤ総督にありました。そこでイエスは総督ポンティオ・ピラトのもとに連れて行かれます。

今回は、そこでの裁判について書きたいと思います。

【お詫び】 今回、内容が予定していたものより多くなってしまいました。前回予告いたしました「イエスの磔刑が、なぜ〈人々の救い〉になるのか」については、イエスの十字架上の死の話の後に説明いたします。もうしばらくお待ちください。

【引用・参考にした書籍】

- ・山浦玄嗣 『走れ、イエス』 / 『ガリラヤのイエシュー』
- ・山我哲雄 『キリスト教入門』 ・森 一弘 『キリスト教入門 Q&A』
- ・新約聖書翻訳委員会訳 『新約聖書』(岩波書店、2008) ・『岩波 キリスト教辞典』
- ・遠藤周作 『遠藤周作文学全集 11 評伝Ⅱ』より 『イエスの生涯』(新潮社、2000)
- ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』